

【研究ノート】

## 李志恒『漂舟録』にみえるアイヌ語について

中村和之

はじめに

1696年(元禄9、肅宗22)、北海道の北部にある礼文島に漂着した朝鮮王朝の下級官吏である李志恒の残した『漂舟録』は、17世紀末の北海道についての貴重な記録である。漢文で記されていることもあってか、この史料が北海道史や日本列島の北方史の分野で注目されるようになったのは、1994年に池内敏氏による日本語訳(池内1994)が発表されたのがきっかけである。その後、いくつかの研究が発表されたが(池内1995、池内2006、中村1998)、必ずしも研究が進んでいるとはいえない。だがこの史料は、17世紀の北海道のアイヌ語の音を記録している点でも、非常に貴重なものである。

筆者は、かねがね『漂舟録』にみえるアイヌ語の研究がないのを残念に思っていた。この研究を行うためには、まずこの当時の朝鮮語(韓国語)の発音を知らなければならないが、それは筆者の能力を越えることであった。ところが最近、大韓民国・釜山市の釜慶大学校で韓国語を研究されている蔡榮姫教授から、このことについて教える機会があった。そこで本稿では、『漂舟録』にみえるアイヌ語の単語についてごく簡単な考察を加え、今後の研究に基礎的な情報を提供することにしたい。

### 1 李志恒『漂舟録』が伝える漂流してから松前着までの顛末と日本側の記録

まず、李志恒『漂舟録』の記述に従って、漂流してから松前に着くまでの彼ら一行の動きを辿ってみよう。以下、池内敏氏の日本語訳から適宜要約して紹介する。

李志恒は、4月13日に、東萊府から寧海に向かう目的で船に乗って出発した。浦ごとに停泊して、4月28日に出航した後、乗っている船が流され、12日間の漂流の後に「泰山」のような陸地が見えたので、そこに上陸した。山の中腹から上は雪がいっぱいに覆っており、人はみな黄色い衣を着て、黒い髪に長いひげであった。李志恒の一行には、釜山出身の金白善という倭語(日本語)ができる者がいたので、話しかけてみたが全く通じなかった。李志恒は、丘の上に立ってまわりを眺めてみたところ、陸地が東北側に見えたので、小さな海をひとつ越えてそこにたどり着いた。そこにも同じような人たちが住んでいた。土地を指して名を尋ねたところ、諸毛谷(je-mo-gok)と言った。そこから30里ほど移動したところで土地の名前を尋ねたら、占毛谷(jeom-mo-gok)と言われた。山すその高くなったところに登って眺めてみたところ、東南間に長い陸地が見え、山がそびえ立っていた。そこを指して尋ねたところ、至谷(ji-gok)と答えられた。距離を見積もってみたところ、30里ほどであったが、実際にはもっと遠かった。そこにたどり着いて地名を尋ねたところ、小有我(so-yu-a)だと言われた。

数日間そこにとどまり、堯老和那(yo-ro-hwa-na)という草の根を掘り、粥を作って食べた。この草の葉は芭蕉によく似ており、根は大根によく似ていた。また、自分たちの衣服と貂皮の服などを交易した。船を指さしながら、帰る道を聞いてみたところ、手で南方を示し、息を吹き出して風の意を示してから、마즈마이(ma-jeu-ma-i)と言った。そこで、東方にある陸地沿いに南下した。途中で出会った人に同じ問いをくり返したが、彼らは마지마이(ma-ji-ma-i)と言うばかりだった。21日目に、海岸の高いところから手を振りながら呼ぶ人たちが

いた。それは二人の倭人で、金白善とも少しはことばが通じた。彼らは南村府 (nam-chon-bu) の倭人で、金を採掘するためにそこへ来ているということであった。彼らは、白米・葉たばこ・醤油・塩をくれ、さらに緘封した手紙を渡してきた。手紙を開けてみたが、日本の文字だったので、内容はわからなかった。ただ、文章の下に、漢字で「松前人新谷十郎兵衛」と書いてあった。すぐに出発し、50 里ばかり進んだところで停泊した。金白善に、紙に筆で倭語を書いて尋ねさせたところ、国号は蝦夷国、地名は溪西隅だった。翌日、7, 80 里進んだところで上陸した。そこには倭人の頭目がい、「私は松前奉行の者で、名は新谷十郎兵衛である」という短い文章を書き示した。また、初めに停泊したのはどこかと聞かれたので、金白善に諸毛谷 (je-mo-gok) という地名を発音させたところ、その倭人は「蝦夷地の果てである。ここからは 2000 里ほど遠ざかっており、松前からすると 3600 里ほどである」と答えた。また「あなた方が停泊したと聞いたところの外側には、また別に羯悪島 (ga-rak-do) と呼ばれるところがある」とも言った。

7 月 1 日に、新谷十郎兵衛の船に乗り、武田大兵衛・仙台六右衛門・秋田喜左衛門などとともに出発した。一行のなかには、蝦夷通事の高山間兵衛もいた。李志恒は、船のなかで蝦夷通事に漢字を書いて質問した。李志恒が「蝦夷が『마즈마이 (ma-jeu-ma-i)』』というのは何のことですか」と質問すると、高山は「松前のことです」と答えた。同じく「『앙그랍에 (ang-geu-rab-e)』』とは何ですか」と質問すると、「平安という意味です」と答えた。「『빌기의 (bil-gi-ui)』』は何ですか」と質問すると、「暖かい (優しい) という意味です」と答えた。「『악기 (ak-gi)』』とは何ですか」と質問すると、「水です」と答えた。「『아비 (a-bi)』』とは何ですか」と質問すると、「火です」という返答であった。4 日進んだところで、逆風に遭い浦口に船を停めて留まった。連日逆風が吹くので、同じ所に留まったまま 3 日になった。翌日、海岸沿いに進んだ。3 日過ぎてのちに、大きな海をひとつ越えて、あるところに到ったが、そこは石将浦 (seok-jang-po) と呼ばれていた。その海は蝦夷国との分界となる海であった。7 月 10 日甲子、南風が強く吹き、雨が降りしきった。十郎兵衛は、李志恒が悲しがっている様子を見て、金を出して美酒を買い求め慰めてくれた。日本語のできる金白善は、李志恒とは別の船に乗っており、お互いの様子について話を交わすことができない状態であった。同月 23 日、松前府の北方 100 余里ほどの曳沙峙 (ye-sa-chi) というところに到着し、3 日留まった。ここから李志恒だけが輜かこに乗り、26 日、松前まで 70 里ほどのところに到った。27 日、松前まで 10 里ほどのところで食事をし、衣冠を端正にして松前府に入った。

以上が、『漂舟録』の記す李志恒の行動である。彼らについては、日本側に対応する史料がいくつか残されている (松本・三浦・東 2006)。最もまとまっているのが、『福山秘府』巻之 30~31 の朝鮮漂人部上・下である (北海道庁 1936)。以下、同書に従って李志恒一行の行動を辿ってみよう。

まず、李志恒が東萊府を出発したのは、4 月 13 日であり、28 日に強風に会い流された。途中で日本の大きな船に出会って食料や水を貰い、その船について進んでいたが、強風ではぐれてしまった。5 月 12 日に、日本の北の土地にたどり着いたとある<sup>1</sup>。この地とは「レフンシリ」、つまり礼文島のことであろう<sup>2</sup>。李志恒は漂流して 12 日目に陸に着いたと記しているが、実際には 14 日目である。「レフンシリ」から「リイシリ」を経て、5 月 13 日に「ソウヤ」に着いた。「リイシリ」は利尻島、「ソウヤ」は宗谷である。宗谷では蝦夷の世話を受け、数日滞在してから 5 月 20 日に羽保呂へ着いたが<sup>3</sup>、ここは現在の羽幌である。羽保呂では、金堀奉行の新谷十郎兵衛に保護された。羽保呂を出発した日は、李志恒の言うとおりの 7 月

1日と見て良いであろう<sup>4</sup>。したがって、40日間も羽保呂に留められたことになる。この間、取り調べを受けたものと思われる。その取り調べが、キリスト教に関するものであったことを示唆する史料も残っているが<sup>5</sup>、なぜか李志恒はそのことについて全く触れていない。また、羽保呂に着くまでの間の行程についても、アイヌの男性から鱒を恵んでもらって食べたなどの記述はあるものの、ことばも通じない未知の土地を自力で進んでいたかのような表現に終始している。しかし、『福山秘府』には、礼文島や利尻島のアイヌの首長から、宗谷へ連絡が届いていることが記されており<sup>6</sup>、李志恒一行に対する保護・観察がある程度は行われていたものと思われる。

李志恒と孔哲の二人は、羽保呂から新谷十郎兵衛の船に乗って松前に向かい、金白善ら残りの6人は自分たちの船に乗って松前に向かった。これは彼らの希望であったようである。金白善と別の船に乗っていることは、李志恒も記しているとおりである。金白善たちは、7月19日に松前に着いた。李志恒と孔哲を乗せた船は、少し遅れて7月24日に松前に着き、翌25日に二人は松前城に登城している<sup>7</sup>。『漂舟録』では、松前着を7月27日としており、なぜかここだけ3日間のずれがあるが、その理由は不明である。

以上のように、李志恒『漂舟録』の記載と『福山秘府』などの日本側史料とを比較すると、大まかな日付と移動経路などは共通することがわかった。その一方で、『漂舟録』には、漂流の途中で日本の船から食料や水をもらっていることや、羽保呂で取り調べを受けたことについて全く触れていないなど、意図的に記載を避けたと思われる点がある。

## 2 『漂舟録』にみえるアイヌ語の検討

池内敏氏によれば、李志恒『漂舟録』には、『海行摠載』所収の活字本がある。また、これとは別に『李志恒漂海録』という名の写本も存在するが、この写本は大韓民国国立中央図書館と東京大学附属図書館阿川文庫に1冊ずつ所蔵されている。李志恒『漂舟録』は、ほとんどが漢文であるが、いくつかの単語はハングルを用いて表記されている。前章で紹介した마지마이 (ma-ji-ma-i) などは、その一例である。それに対して『李志恒漂海録』は、二つの写本とも全文が漢文である。したがって、地名などもすべて漢字を用いて表記されている。

これらの、ハングルや漢字で表記されたアイヌ語を検討するためには、17世紀の朝鮮語（韓国語）の発音を知らなければならない。蔡榮姫氏のご教示によれば、17世紀の朝鮮語（韓国語）の発音は、現代の発音と変わらないということである。そこで、以下では、現代の韓国語の表記法にしたがってハングルや漢字をローマナイズし、検討を加えることとする。

『漂舟録』にみえるアイヌ語は、三つに区分することができる。まず旅の途中で聞き取ったアイヌ語の地名、つぎに蝦夷通事の高山間兵衛から意味を教えてもらったアイヌ語、それに植物名である。以下、順に検討を加えることにする。

なお、李志恒は、新谷十郎兵衛などの日本人とは筆談で意思を通じたが、金白善が一緒にいる場面では、金白善に通訳をさせており、このような場面では、筆談と通訳の両方を使って会話を進めたと推定される。金白善の日本語の会話能力については、「六人ノ内金僉知ト申者、日本詞能存候」と記されており<sup>8</sup>、松前藩側からも高く評価されていた。ただし、前述したように、羽幌から松前までの船の旅では、李志恒と金白善は別行動である。

### 2-1 アイヌ語の地名

李志恒『漂舟録』には、11個の地名が記録されている。諸毛谷 (je-mo-gok)、占毛谷

(jeom-mo-gok)、至谷(ji-gok)、小有我(so-yu-a)、마즈마이(ma-jeu-ma-i)、마지마이(ma-ji-ma-i)、南村府(nam-chon-bu)、溪西隅(gye-seo-u)、羯悪島(ga-rak-do)、石将浦(seok-jang-po)、曳沙峙(ye-sa-chi)である。これらのなかで、位置がわかっている地名は4つ、厳密に言えば3つしかない。それらは、いずれも池内敏氏がすでに比定している(池内1994)。まず小有我(so-yu-a)は、北海道の最北端の宗谷とする。また、마즈마이(ma-jeu-ma-i)と마지마이(ma-ji-ma-i)は、ともに松前のことである。松前の北方百里に位置する曳沙峙(ye-sa-chi)は、江差のこととする。いずれも池内氏の見解に従いたい。このほか、羯悪島(ga-rak-do)はサハリン(樺太)島の当時の呼び名である「唐渡之島(からとのしま)」のことである(中村2006)。

残る6つのなかで、南村府(nam-chon-bu)、溪西隅(gye-se-ou)それに石将浦(seok-jang-po)の3つは、筆談で知った漢字かその可能性が高いものである。これに対して、諸毛谷(je-mo-gok)、占毛谷(jeom-mo-gok)、至谷(ji-gok)の3つは、礼文島から利尻島を経て宗谷に到る道筋でアイヌから教えてもらった地名であり、アイヌ語地名と考えてよいものである。ただし、これらの地名の位置を明らかにすることはできない。

なお、李志恒『漂舟録』で、마즈마이(ma-jeu-ma-i)と마지마이(ma-ji-ma-i)とあるところは、『李志恒漂海録』では、麼子麼耳(ma-ja-ma-i)と記されている。

## 2-2 蝦夷通事から教えてもらったアイヌ語

李志恒が、蝦夷通事の高山間兵衛からアイヌ語の意味を教えてもらったのは、羽保呂から江差に向かう船のなかのことである。李志恒は、蝦夷通事に漢字を書いて質問したことを明記している。しかし、漢字を書くといっても、アイヌ語を漢字で書けるわけではないから、李志恒が聞きとったアイヌ語の意味を、漢字で書いてもらったということであろう。まず、池内敏氏の日本語訳をあげる。

7月1日。発船し、ただちに松前太守のもとに向けて進んだ。私は船に乗っている間に(漢)字を書いて、(それまでに)私が詳しくはわからないでいたことばや物情について、蝦夷通事に尋ねた。「蝦夷が『마즈마이(ma-jeu-ma-i)』』と言っていたのは、何のことか?」「松前の事です」また問うた。「『앙그랍애(ang-geu-rab-e)』』とは何のことですか?」「平安という意味です」「『빌기의(bil-gi-ui)』』とは何ですか?」「暖かい(優しい)という意味です」「『악기(ak-gi)』』とは何ですか?」「水です」「『아비(a-bi)』』とは何ですか?」「火です」これらの言葉は、倭語と比較してみるとまったく違っていた。

李志恒『漂舟録』では、上記の部分は、

七月初一日發船。一時歸現於松前太守前。余在船中日、與書示探識其言語物情而不盡詳知。問蝦夷通事者曰、蝦夷等마즈마이云者何言耶。曰謂松前稱也。又問앙그랍애何耶。曰平安也。빌기의何也。美也。악기何也。水也。아비何也。火也。憑以倭語則大相不同。

とある。『李志恒漂海録』では、やや簡略であるが、

七月初一日。與此五人同發船〔東大本は發船〕、向松前。五人者皆將歸〔東大本は帰〕見太守。志恒在船中、問通事以蝦夷風俗言語。答曰麼子麼耳謂松前也。臥可謂水也。阿比謂火也。

となっている。

では、これらの語について検討することにしよう。筆者は、アイヌ語については知識がな

いので、奥田統己氏、児島恭子氏、大谷洋一氏などをお願いして、推定されるアイヌ語について教えていただいた。むろん、本稿の文責は筆者にあるが、奥田氏はじめ諸氏のご教示に深く感謝申しあげる次第である。

まず、火とされている야비 (a-bi) ないし阿比 (a-bi) は、アイヌ語の ape のことで、意味は「火」である。この比定は確実なものといえよう。つぎに、水とされている악기 (ak-gi) ないし臥可 (wa-ga) は、アイヌ語の wakka のことで、意味は「水」である。wa-ga は発音が近いが、ak-gi ではやや遠い。この発音の差が何に起因するものなのか、現段階では明らかにできない。はっきりした比定ができないのは、残る 2 語である。筆者は、平安とされている 앙그랍애 (ang-geu-rab-e) は、アイヌ語の irankarapte あるいは iyankarapte で「こんにちは」の意味ではないかと考えた。ang-geu-rab-e と irankarapte とでは、音がかけ離れているとも考えられるが、金田一京助によれば、irankarapte はヤングラフテと訛った形で使われていたことがあったという<sup>9</sup>。このようなことを考えあわせると、ang-geu-rab-e が irankarapte ないし iyankarapte である可能性は否定できないと思う<sup>10</sup>。最も判断が難しいのが、暖かい（優しい）とされている빌기의 (bil-gi-ui) である。思いつくアイヌ語として、「きれいだね」という意味の pirka wa をあげることができるが、あくまで推定である。特に説明がつかないのは、pirka wa の wa が ui と表記されていることである。水の ak-gi でもいえることだが、語尾の a が i で表記されている。このことにどのような理由があるのかは、今後の検討課題である。

### 2-3 堯老和那という植物名

李志恒がアイヌから教えてもらった、堯老和那 (yo-ro-hwa-na) という植物について考えてみよう。李志恒は、この草の根で粥を作って食べたこと、草の葉は芭蕉によく似ており、根は大根によく似ていたことをのべている。これらのことから、堯老和那はオオウバユリとみて良いであろう。アイヌの人びとは、オオウバユリの球根からデンプンを取ったり、だんごを作ったりしている。福岡イト子氏によれば、旭川の近文では 7 月 10 日ごろがウバユリ掘りに最も良い時期とされていた (福岡 1995)。李志恒一行は、羽保呂へ着く前に堯老和那を掘って食べている。彼らが羽保呂に着いた元禄 9 年 5 月 20 日は、1696 年 6 月 19 日にあたる (湯浅 1990)。オオウバユリを掘るには少し早いようだが、季節はずれではあるまい。以上のように時期的な問題からみても、堯老和那はオオウバユリとみて良いであろう。しかし、アイヌ語ではオオウバユリは turep であり (知里 1976)、管見の限り、オオウバユリに yo-ro-hwa-na に類する呼称は見あたらない。この問題も今後の課題としたい。

おわりに

李志恒『漂舟録』は、日本列島の北方地域についての貴重な文献である。史料として利用するには注意が必要であるが、本稿で取りあげたアイヌ語については不自然な記述がなく、17 世紀末のアイヌ語の記録としては、信頼できる史料と考える。しかし、李志恒が書き記したアイヌ語が、彼が聞き取ったアイヌ語のままだったのか、それとも蝦夷通事に教えてもらった音なのか、また李志恒の聞き取ったアイヌ語はどこの方言だったのかなど、検討しなければならない点が多い。今後、しかるべきアイヌ語の研究者の手により、研究が進むことを期待したい。

## [謝辞]

大韓民国・釜慶大学の蔡榮姫先生と申宗大先生には、近世の韓国語の発音や表記についてご指導をいただいた。また京都府立大学の井上直樹先生には、大韓民国国立中央図書館蔵の『李志恒漂海録』の複写を送っていただいた。あわせて深く感謝申し上げます。

## [注]

- 1 『福山秘府』巻之 30、朝鮮漂人部上、朝鮮國漂人李志恒呈辭、  
四月十三日。只以<sub>レ</sub>單身<sub>ニ</sub>乗<sub>リ</sub>此小舟<sub>ニ</sub>。……同月二十八日、海洋中猝遇<sub>レ</sub>狂風<sub>ニ</sub>、舟中尾木折破、不能<sub>レ</sub>制<sub>ス</sub>船<sub>ニ</sub>。……幸頼<sub>リ</sub>天助<sub>ニ</sub>。五月十二日始泊<sub>リ</sub>于貴州北土一境<sub>ニ</sub>。
- 2 『福山秘府』巻之 30、朝鮮漂人部上、依<sub>リ</sub>朝鮮人漂着<sub>ニ</sub>而、外崎新十郎出府之節、北條安房守殿へ被<sub>レ</sub>差出<sub>ス</sub>候書札、  
一 當所西蝦夷地「レフンシリ」ト申島へ八人乗候異國船漂着仕、夫ヨリ「リイシリ」ト申島へ參、蝦夷ノ教ニテ「ソウヤ」ト申所へ着、「ソウヤ」蝦夷介抱仕候テ、當五月二十日羽保呂ト申所へ參着仕候。
- 3 『福山秘府』巻之 30、朝鮮漂人部上、依<sub>リ</sub>朝鮮人漂着<sub>ニ</sub>而、外崎新十郎出府之節、北條安房守殿へ被<sub>レ</sub>差出<sub>ス</sub>候書札、  
一 當五月十三日「ソウヤ」ト申所へ着、五六日滞留仕候テ、五月廿日羽保呂へ參、六人ノ異國ノ者、七月十二日江差村へ着、七月十九日當所へ參着仕候。六人ノ内金僉知ト申者、日本詞能存候。七月二十日僉議仕候處、朝鮮國釜山浦ノ者ノ由。江原道府伯へ見舞ニ參候故、當四月朔日出船、同廿八日逢<sub>レ</sub>大風<sub>ニ</sub>、折<sub>レ</sub>梶、海上數日漂流仕候而「レフンシリ」へ着仕候由申候。當月十九日「ソウヤ」へ差遣候私手船罷歸候。「ソウヤ」夷人ノ頭カチホツテ、シカタイヌ、ライ此三人方ヨリ異國船ノ様子申越候。レフンシリ蝦夷人ノ頭タロウナ、リイシリ蝦夷人ノ頭イヌシマエキワカ兩人、右ノ者共段々ソウヤへ相通候。異國之詞蝦夷ト一圓通不<sub>レ</sub>申候故、大方推量ニ存候趣申越候。
- 4 『福山秘府』巻之 30、朝鮮漂人部上、從<sub>リ</sub>朝鮮國<sub>ニ</sub>流來船、松前迄爲<sub>レ</sub>登申付候口上之書之事、は、新谷重郎兵衛の名で出され、「元禄九年丙子七月朔日」の日付である。この文書の宛先は、御船上乗衆中、同船頭衆、夷地津々浦々商船上乗船頭衆、などとなっており、新谷十郎兵衛の船とは別に、自分たちの船で松前に向かう金白善ら六名に与えた文書と思われる。この7月1日が、羽保呂を出発した日付とみて良いであろう。
- 5 『福山秘府』巻之 30、朝鮮漂人部上、朝鮮國漂人李志恒呈辭、  
……耶蘇者之言不<sub>レ</sub>知。朝鮮元無。
- 6 注3史料。
- 7 『福山秘府』巻之 30、朝鮮漂人部上、朝鮮人館前高札竝勤番條目、  
元禄九年丙子七月十九日、朝鮮人六人、從<sub>リ</sub>西在郷<sub>ニ</sub>到着、令<sub>レ</sub>登城<sub>ニ</sub>、同月廿四日、李先達、孔裨將兩人從<sub>リ</sub>江差<sub>ニ</sub>陸地到着、同廿五日兩人登城、旅館横町並川宇左衛門宅也。
- 8 注3史料。
- 9 金田一京助「イランカラプテ」（金田一1993:177-178）には、つぎのようにある。  
もともと、多くの邦人のいっているのはヤングラフテと訛った形で、それでもお互いの間にはよくわかって通用しているのである。……もともと樺太発音では *Iramkarap-te* の *p* の音がドイツ語の *ch* の音に発音されるから、イランカラフテあるいはイランカラッテでも通じるものであるが、ヤングラフテはずいぶん激しい訛音である。
- 10 朝鮮語（韓国語）には、音節の末尾に子音が置かれることがある。この子音をパッチムという。ang-geu-rab-e の *b* は、つぎに *e* の音があるために、ふつうは *rabe* と発音される。だが、*rabe* という音を表すのであれば、ハングルで *ra-be* と表記すれば良いのだから、わざわざ *rab-e* と書く理由が見あたらない。筆者は、*rab-e* の *b* に注目している。この *b* はパッチムであり、*rab* が単独に存在したとすれば、末尾の *b* は *p* の内破音に発音される。実は、アイヌ語にもよく似た発音がある。筆者は、ang-geu-rab-e の *rab-e* の部分は、*irankarapte* の *rapte* の部分の音の特徴を、パッチムを用いて表現したものではないかと考えている。

## [参考文献]

池内 敏

1994「李志恒『漂舟録』について」『鳥取大学教養部紀要』第28巻。

1995 「17世紀、蝦夷地に漂着した朝鮮人」『日本国家の史的特質（近代・近世）』思文閣出版。

2006 『大君外交と「武威」』名古屋大学出版会。

金田一京助

1993 「イランカラプテアイヌをにっこりさせる一言」『金田一京助全集』第14巻、三省堂。

知里真志保

1976 『分類アイヌ語辞典植物編』『知里真志保著作集』別巻I、平凡社。

中村和之

1998 「李志恒『漂舟録』にみえる蝦夷錦について」『北海道の文化』第70号。

2006 「李志恒『漂舟録』にみえる『羯悪島』について」『史朋』第39号。

福岡イト子

1995 『アイヌ植物誌』草風館。

北海道庁

1936 『福山秘府』『新撰北海道史』第5巻、北海道庁。

松本あづさ・三浦泰之・東俊佑

2006 「近藤家資料のなかの異国船関係史料」『北海道開拓記念館調査報告』第45号。

湯浅吉美

1990 『増補日本暦日便覧』索引篇・増補篇、汲古書院。

(なかむら・かずゆき／函館工業高等専門学校)